法然仏教学研究センター　2014 年度全体研究会

〈第 1 回〉

日　時：2014 年 5 月 19 日（月）

参加者：17 名

・研究発表

発表者：真柄和人（当センター嘱託研究員・知恩院浄土宗学研究所嘱託研究員）

テーマ：要偈道場について

要　旨：要偈道場とは法然上人が善導大師から夢中において伝えられた四句の偈文を、五重相伝という浄土宗伝統の僧侶養成道場（加行）や信者獲得の道場（化他五重）の中で、受者に授ける儀式である。現在行なわれる加行は、江戸時代の道誉流・感誉流の伝法を基本とするが、その代表例である天明期の増上寺の加行を、法然院蔵『三脈口訣』と『増上寺日鑑』で復元。伝法は政治的要素をからめて変化していることが判明。「要偈」の意味を読み取ると、まさしく要偈は『選択集』の要旨を表現している。

・各班進捗状況発表

〈第 2 回〉

日　時：2014 年 6 月 23 日（月）

参加者：18 名

・研究発表

発表者：南　宏信（当センター嘱託研究員・本学非常勤講師）

テーマ：身延文庫蔵『決疑鈔揉議』巻第十一について―諸版本との比較を通じて―

要　旨：身延文庫は大永七年（1527）書写の『決疑鈔揉議』巻第十一を蔵する。内容を見るに浄土宗第七祖聖冏撰『決疑鈔直牒』巻七に概ね対応すると思われるが、文章に相当の相違があることも確認した。『決疑鈔直牒』の現存諸本は寛永六年（1629）版が最古であり、身延文庫本はそれよりさらに百二年遡る唯一の写本である。そこで身延文庫本を繙く前作業として諸版本九種（巻七）を比較し、これらは全て同内容を保持していることを確認した。これは同時に身延文庫本の特異性を際立たせる結果となった。

・各班進捗状況発表

〈第 3 回〉

日　時：2014 年 10 月 24 日（金）

参加者：14 名

・研究発表

発表者：伊藤茂樹（当センター嘱託研究員・知恩院浄土宗学研究所研究員）

テーマ：法然門流の研究―長楽寺隆寛から―

要　旨：法然門流における研究状況を把握しようとする中、ひとまず隆寛に焦点を当てて考察するという。法然の門流と言えば『私聚百因縁集』や日蓮の『一代五時図』、凝然『浄土法門源流章』で指摘される五流が代表的。幸西（一念義）、證空（西山義）、長西（諸行本願義）、聖光（鎮西義）、隆寛（多念義）が知られる。特に凝然は『浄土法門源流章』において門弟の教学の解明に力点を置き、以後の門下研究に重要な影響をあたえた。また江戸期において法然門流（異流）の研究は、真宗学で盛んにみられる。隆寛については、大谷派の了祥が、隆寛と親鸞の比較でその影響に言及、その流れが現代の真宗系学者にも受け継がれてきた。しかし、これらの研究には史料等に限界が見られた。

そういった状況の中、金沢文庫で、隆寛に関する新史料が発見され、隆寛研究に新たな方向性がもたらされた。その集大成が平井正誠著『隆寛律師の浄土教』であり、隆寛研究に大きな進展がみられることになる。以後も『明義進行集』『知恩講私記』『天台諸大師講式』『礼讃問答』など新史料が発見紹介され、様々な研究の進展をみせたという。

また近年の研究からは、天台僧としての隆寛の立場、『選択集』を相伝された法然の門弟としての立場、歌人、法然滅後の法難に立ち向かう立場等々、多方面の行動が見られるという。今後も隆寛研究の蓄積を検討しまとめ、研究の可能性を探りたいという報告であった。

・各班進捗状況発表

〈第 4 回〉

日　時：2014 年 12 月 19 日（金）

参加者：19 名

・研究発表

発表者：曽和義宏（当センター研究員・本学仏教学部准教授）

テーマ：浄土教と感応思想

要　旨：中国仏教における仏身仏土論は二身論的な仏身規定に集斂され、かつ菩薩の修行階梯によって仏身を区別している。これは感応思想に基づいているとの仮説に立ち、浄土教祖師の感応思想の影響について考察を加えた。

感応思想を基底として仏身仏土を論ずる限り、すべて二身論的な解釈となる。一方、道綽と善導は、阿弥陀仏の仏身規定については、感応思想の影響が希薄で、二身論的な理解をしない。これは報身という概念の明確化であるといえる。

ただし道綽は「感応の不同」ということを述べており、また上輩・中下輩という区別をすることから、感応思想の影響を受けていることが分かる。

善導は、衆生と仏の関係性ということで「三縁釈」を設定するが、阿弥陀仏の応の発動を、機ではなく称名念仏という行に転換している。称名念仏という行が、応の発動する因となるのは本願の行だからである。従来の、衆生からの働きかけではなく、仏と衆生のそれぞれからの働きかけがある、とする点が、善導の特異な感応思想理解であると思われる。

・各班進捗状況発表

〈第 5 回〉

日　時：2015 年 1 月 23 日（金）

参加者：11 名

・研究発表

発表者：加藤弘孝（当センター嘱託研究員・知恩院浄土宗学研究所研究助手）

テーマ：中唐期浄土教理史採探―善導流の系譜を手がかりに―

要　旨：本発表では中唐期における浄土教理史の再検討を試みた。具体的には、発表者が体系研究を継続してきた『念仏三昧宝王論』（飛錫撰）という浄土教典籍を基軸に据えて、同時代に成立した他の浄土教典籍との思想的関連を確認していくという方法論をとった。その結果、縦軸（時系列）においては、廬山慧遠への信仰態度が、中唐期の浄土教家らの思想変遷を把握する際に指標と成り得ること、横軸（思想系統）においては、善導に対する信仰姿勢が、その指標と成り得ることを明確にした。なお中

唐期の浄土教家はみな善導思想の間接的影響を蒙っていると見做せるので、本研究は善導流の系譜を解明するのと同義であるとも言える。

・各班進捗状況発表

以上